

# 法華經における上慢の四衆との 関係より見たる菩薩行（その五）

伊 藤 瑞 叡

- (七) 分別功德品第十七における（一念信解  
ないし深心信解、聽聞隨喜ないし勤修六  
度の）善男子善女人と、増上慢ないし行  
五波羅蜜の菩薩

## 要文摘出

⑫ 分別功德品のいわゆる〈現在の四信〉を説く長行と偈頌と長  
行に左の如くある。<sup>(1)</sup>

### 〈第一の一念信解〉

阿逸多よ、この如来の寿命の説示の法門が説示されるとき、およ  
そ諸衆生あつて一（念の）心に發起する信解を生じたり、信受を作し

法華經における上慢の四衆との関係より見たる菩薩行（その五）（伊藤）

たりするならば、それら善男子や善女人たちは、どれほどの福德を  
生ずるであらうか (yair Ajitasmims tathāgatāyus-pramāna-nirdeśa-  
dharma-paryāye nirdeśyamāne sattvair eka-cittōpādikā py adhimu=  
ktir utpādītā bhīraddadhānātā vā kṛtā kiyat te kula-putrā vā  
kula-duhitaro vā punyam prasravanti)。……この福德の生成、善の  
生成に対比すると、八億百千那由他劫に成満され五波羅蜜によつて  
成就される前者の福德の生成、善の生成は、百分の一にも及ばない  
(asya puṇyābhisaṃskārasya kuśalābhisaṃskārasyaṃ pauravakāḥ  
puṇyābhisaṃskārah kuśalābhisaṃskārah pañca-pāramitā-pratīsanīyū=  
kto~śātatanim api kalām nopayāti)。……かれら善男子・善女人は  
無上正等覺より退轉する (vīvartate) という、このことわりはない。  
(阿逸多、其れ衆生あつて、仏の寿命の長遠是の如くなるを聞き、乃至能く  
一念の信解を生ぜば、所得の功德限量あることなけん。若し善男子・善女人

あり、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、八十万億那由佉劫に於て五波羅蜜を行ぜん。……是の功徳を以て前の功徳に比ぶるに百分……にして其の一にも及ばず。乃至算數・譬論も知ること能はざる所なり。若し善男子、是の如き功徳あつて、阿耨多羅三藐三菩提に於て退すといはく、是の処あることなけん。

……………

- (17) およそ最上の仏智たるこの智を求めて、この世で五波羅蜜を受けて行ずるものありとしよう(yas ca pārānitāḥ pañca samā = dayeḥa vartate | idam jñānam gaveśanto buddha-jñānam anu = ttaram = 17 = 若し人仏慧を求め 八十万億 那由佉の劫數に於て 五波羅蜜を行ぜん)。
- ……………

- (23) また忍辱を修して調柔の地に安住し、堅持を具え憶念を具えて多くの瞋辱ありても堪忍するとしよう (punaś ca kṣāntim bhāveta danta-bhūmanu pratisīhitāḥ | dhṛtimān smṛtimānś cāva paribhāśāḥ kṣame bahubh = 23 = 若し復忍辱を行つ 調柔の地に 住し 設ひ衆の惡來り加ふとも 其の心傾動せざらん)。
- (24) 得たりとする増上慢に安住する諸衆生ありて、かれらの輕悩をも仏智を(求める)ために忍受するとしよう (ye cōpalambh = itāḥ sattvā adhimāne pratisīhitāḥ | kutsanam ca sahet tesām buddha-jñānasya karanāt = 24 = 諸の有ゆる得法の者の 増上慢を

懐ける 斯れに輕しめ悩まされん 是の如きをも亦能く忍ばん)。

……………

- (28) その勇者は禪定によつて最上の菩提を求め、「われは一切智者にならう」と、禪波羅蜜に至るとしよう (tena dhyanena so virah prāthayed bodhim uttamām | ahaṃ syām iti sarvajño dhyanāpārānitām gataḥ = 28 = 此の一心の福を持つて 無上道を 願求し 我一切智を得て 諸の 禪定の際を尽くさんと)。
- ……………

- (30) しかるに女人もしくは男子あつて、われの壽命を聞いて、一刹那でも信するならば、その福徳は無辺である (āyur ca mama yo śrutvā stri vā 'pi puruṣo 'pi vā | eka-kṣānam pi śraddhāti idam puṇyam anantakam = 30 = 善男女等あつて 我が壽命を説く を聞き 乃至一念も信せば 其の福彼に過ぎん)。

- (31) 疑と動揺と猶豫とを捨て、瞬時も信解するならば、その果報はかくの如く(無辺)である (vicikitsām ca varjitvā injitā ma = nyitani ca | adhimucyen muhūrtam pi phalam tasyedam idṛśam = 31 = 若し人 悉く 一切の諸の疑悔あることなく 深心に須臾も 信ぜん 其の福此の如くなることを為)。

- (35) われもまた未來世には一切の有情に尊敬せられ、菩提座に坐して、かかる壽命を示すであらう」(と願ふ) (aham apy an = āgate 'dhvani sat-kṛtāḥ sarva-dehinām | bodhi-maṇḍe nisīditvā

gyam desesyam idīsam 35 我等も未来世に一切に尊敬せられて道場に坐せん時 寿を説くこと亦是の如くならんと願せん。

(30) 深心を具足し所聞を受持するところの人々は、密意説(=隨宜所説意趣)を識別し、かれらには疑は存在しない(ādhyāśayena sampannāḥ śrutāccharās ca ye narah | sandhā-bhāṣyaṃ vijānanti kankṣā tesāṃ na vidyate 36) 若し深心あらん者 清浄にして質直に 多聞にして能く総持し 義に随って仏語を解せん 是の如き諸人等 此に於て疑あることなけん。

#### 〈第二の略解言趣〉

阿逸多よ、およそこの如来の寿量の説示という法門を聴聞して趣入する、(すなわち) 信解し領解し隨覚するものは、仏智を成就せしめるべき、かれより一層無量なる福德の生成を生ずるであろう(… ya imam tathāgatāyus-pramāṇa-nirdeśaṃ dharmā-paryāyaṃ śrutvā 'vatared adhimucyeta vagehetavabudhyeta so 'smād aprameyataram puṇyābhisaṃskāraṃ prasaved buddha-jñāna-samvartanīyaṃ | 又阿逸多、若し仏の寿命長遠なるを聞き、其の言趣を解するあらん。是の人の所得の功德限量あることなく、能く如来の無上の慧を起せん)。

#### 〈第三の広為他説〉

いわんや、かくの如き法門を聴聞し聴聞せしめ誦誦し受持し書写し書写せしめて経卷となせるものを……恭敬し尊重し讚歎し供養し、恭敬せしめるものは、仏智を成就せしめるべき、より多くの福德の

法華經における上慢の四衆との関係より見たる菩薩行(その五)(伊藤)

生成を生ずるなど(kaḥ punar-vādo ya imam evaṃ-rūpaṃ dharmā-paryāyaṃ śmūyāc chrāvayed vācayed dharayed vā līkheḍ vā līkheḍ vā pustaka-gatam vā sat-kuryād guru-kuryān mānayet pūjayet satkārayed… bahutarāṃ puṇyābhisaṃskāraṃ prasaved buddha-jñānasamvartanīyaṃ 何に況んや、広く是の經を聞き、若しは人をして聞かしめ、若しは自らも持ち、若しは人をしても持たしめ、若しは自らも書き、若しは人をしても書かしめ、……経卷に供養せんをや。是の人の功德無量無辺にして、能く一切種智を生ぜん)。

#### 〈第四の深信観成〉

かの善男子・善女人にして、この如来の寿量の説示の法門を聴聞して深心をもって信解するならば、そのとき、かれのその深心の特相は、このように知られるべきである。すなわちわれが靈鷲山にいまして、菩薩衆に圍繞せられ菩薩衆に恭敬せられ声聞衆のただ中にあって、法を説示しているのを、かれは見るであろう(yada' imam tathāgatāyus-pramāṇa-nirdeśaṃ dharmā-paryāyaṃ śrutvā 'dhyāśayaṃ enadhimucyate tadda tasyedam adhyāśaya-lakṣaṇaṃ veditavyaṃ yad uta Gṛdhrakūṭa-parvata-gatam māṃ dharmāṃ nirdeśayantaṃ drakṣyati | 阿逸多、若し善男子・善女人、我が寿命長遠なるを説くを聞いて深心に信解せば、則ちわれ仏常に耆闍崛山に在して、大菩薩・諸の声聞衆の圍繞せると共に説法するを見、……若し能く是の如く観することあらん者は、當に知るべし、是れを深信解の相となづく)。またわがこの仏国たる娑婆

世界が瑠璃より成り平地であり金繩で八道が界され宝樹に蔽飾され  
ているのを見るであらう(idam ca me buddha-ksetram Saham loka-  
dhātum vaidūrya-mayin sama-prastarām drakṣyati suvarṇa-sūtrāṣṭā-  
pada-vinaddhām ratna-vikṣair vicīritām | 又此の娑婆世界其の地瑠  
璃にして坦然平正に 閻浮檀金以て 八通を界ひ、宝樹行列し)。また諸苦  
薩がそこにおける所用の楼閣に住するのを見るであらう(kūṭāgara-  
paribhogesu cātra bohisattvān nivasato drakṣyati | 諸台楼觀皆悉  
く宝をもつて成じ、其の菩薩衆咸く其の中に処せるを見ん)。……

解析構成

① 肯定の対象となる人間像は、一念信解ないし深心信解の善  
男子・善女人である

善男子 (kula-putra)・善女人 (kula-duhit) にして、

〈第一の一念信解〉如来の寿命の説示の法門 (tathagatāyus-pra-  
māṇa-nirdesa-dharma-paryaya 仏寿命長遠)が説示されること、一(念  
の)心に発起する信解を生じ信受を作すならば(ekacittotpādikā…  
adhimuktir utpāditaḥisraddadāhanatā va kṛtā 能生一念信解)、(五  
波羅蜜によって成就されるところがその百分の一にも及ばないこと  
ろの)福德の生成(puṇyābhisamskāra)・善の生成(kuśalābhisamskāra)  
を生ずるだらう(所<sub>レ</sub>得功德。無<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>限量)。別言すれば、(30)如来の

寿命を聞いて、一刹那でも信ずる(āyurṃ…mama…śrutvā, eka-  
kṣaṇam pi śraddhāti 聞我説壽命。乃至一念信解)ならば、すなわ  
ち(31)疑・動搖・猶豫を捨て瞬時も信解する(vicikitsām ca varjītvā  
injīṭā manyitāni ca, adhimucyen muhūrtam 悉無有<sub>レ</sub>一切 諸疑悔、  
深心須臾信)ならば、(17)最上の仏智を求めて五波羅蜜を受けて行ずる  
もの(yaś…pāramitāḥ pañca samādāya…vartate…gaveśato buddha-  
jñānam anuttaram 若人求<sub>レ</sub>仏慧……行<sub>レ</sub>五波羅蜜)よりも、(30)その福  
徳(puṇya 福)・(31)果報(phala 福)は無辺(ananta)である。すな  
わち(35)われもまた未来世には菩提座に坐してかかる寿命を示すべし  
(bodhi-maṇḍe nisīdivā āyur deśeṣyam idīṣam 我等未来世……坐<sub>レ</sub>於  
道場<sub>レ</sub>時 説寿亦如是)と(願して)、(36)深心を具足し所聞を受持する  
人(adhyāśāyena sampannāḥ śrutādhārās ca ye narāḥ 若有<sub>レ</sub>深心者  
諸淨而質直 多聞能総持)として、随宜所説意趣を識別して疑がない  
(samdhā-bhāṣyam vijānanti kankṣā…na vidyate 随<sub>レ</sub>義解<sub>レ</sub>仏語……於  
<sub>レ</sub>此無<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>疑)。

〈第二の略解言趣〉如来の寿命の説示という法門を聴聞して(ta-  
thagatāyus-pramāṇa-nirdesaṁ dharmā-paryāyaṁ śrutvā 若有<sub>レ</sub>聞<sub>レ</sub>仏  
寿命長遠)趣入する(avataret<sub>レ</sub>信解・領解・隨覺する adhimucyetaḥ=  
aghatetāvabudhyeta<sub>レ</sub>解<sub>レ</sub>其言趣)ならば、仏智を成就するべき(bu-  
ddha-jñāna-samvartaniya 能起<sub>レ</sub>如来無上之慧)……より一層の無量な  
る福德の生成を生ずる。

〈第三の広為他説〉聴聞し聴聞せしめ(srinvyac chravyet 広聞是經若教二人聞)……受持し(dharayet 若自持若教二人持)……書写せしめて經卷となせるものを……恭敬せしめる(Ikhanayed va pustakaganam……sat-karayet 供養經卷)ならば、……より多くの福德の生成を生ずるだろう。

〈第四の深信観成〉聴聞して深心をもって信解する(adhyāsaven= adhimucyate 深信信解)ならば、われが靈鷲山にいまして……法を説示してゐるのを(Gidhrakūta-parvata-gatam mān dharmam nirdeśayantan 我常在耆闍崛山……説法)、……わが仏国土として娑婆世界が……宝樹に蔽飾されているのを(me buddha-ksetran Saham loka-dhātum……ratna-vikṣair vicitriam 此娑婆世界……宝樹行列……宝成)見る(draksyati 見)とて深心の特相(adhyāsaya-lakṣana 深信解相)をもつだろう。

⑥ 否定の対象となる人間像は増上慢に安住する衆生である。増上慢に安住する衆生(sattvā adhimāne pratiśhitān 懷於増上慢)は、(未得であるのに)得たり(upalambhitā 得法者)として、(五波羅蜜を受けて行ずるものを)軽悩(kutsana 所輕悩)する。

⑦ 止揚の対象となる人間像は五波羅蜜を受けて行ずる菩薩である。

法華經における上慢の四衆との関係より見たる菩薩行(その五)(伊藤)

この菩薩は般若を除く(virahitāh prajñā-paramitaya)布施・持戒・忍辱・禪定の五波羅蜜を受けて行ずるのであり、ことに(23)言辱(ṣaṣṭhiḥ)を堪忍(ksam 其心不傾動)し、(24)輕悩を忍受(vśah 能忍)して、(25)禪定によって一切智者になろうと禪波羅蜜に到る(tona dhyaena……ahaṃ syām iti sarvajño dhyaṇa-paramitām gataḥ 持此一心福……我得一切智 尽諸禪定際)。この菩薩は般若經の菩薩を予想せしめる。

⑧ 一念信解ないし深信信解(ないし深信観成)の善男善女と増上慢に安住する衆生ないし行五波羅蜜の菩薩との決定的な分岐点は、如来の寿量の説示の法門(如来の寿命)を聴聞し一心に発起する信解によって信受する(一刹那に信する疑を捨てて信解する)ないし信心をもって信解するか否か、すなわち深心を具足し所聞(如来の寿量の説示の法門)を受持して随宜所説意趣(如来の寿命)を識別し疑わぬ、ということの有無にあるといえよう。

\* 如来の寿量の説示の法門を聴聞して深心をもって信解するとき、その深心の特相として、仏常在耆闍崛山説法ないし娑婆世界宝樹行列を觀ることが成ぜられるというような点は、如来寿量品の久遠偈の衆生既信狀(乃至)俱出靈鷲山に照合する。最重要視すべきことである。

要文摘出

⑬ 同じく同品に続いて〈滅後の五品〉が左の如く説かれる。<sup>(2)</sup>

〈滅後の五品の第一の随喜品〉

およそ如来の般涅槃の後に、この法門を聴聞して毀譽しないで、むしろ随喜するならば、それらの善男子を、われは深心によつて信解せるものと称するであらう(…tān apy aham adhyākāyādhimuktān kula-putrān vadāmi ye tathāgatasya parinirvṛtasyeṇam dharmaparyāyan śrutvā na pratikṣepsynty uttari cābhyannumodayiṣyanti—又復如来の滅後に、若し是の経を聞いて毀譽せず、随喜の心を起さん。當に知るべし、已に深信解の相となづく)。

〈第二の読誦品〉

いわんや(これを)受持し読誦するだううところの人々はいうま<sup>でみな</sup>(kaḥ punar-vādo ye dhārayiṣyanti vācayiṣyanti)……われの舍利に対して舍利供養を行ったことになり(kṛtā me…sariteṣu sarira-pūjā)……七宝所成のストゥパを建立したことになる(sapta-ratna-mayās ca stūpāḥ karitā)……舍利ストゥパに対して……恭敬を行ったことなる(sarira-stūpānam…sat-kārah kṛto bhavati 何に況んや、之を讀誦し受持せん者をや。斯の人は則ち為れ如来を頂戴したてまつるなり。……是の經典を受持・読誦せん者は、為れ已に塔を起て、僧坊

を造立し、衆僧を供養するなり。則ち為れ仏舍利を以て七宝の塔を起て、……是の供養を作し已るなり)。

〈第三の説法品〉

……われの般涅槃の後に、この法門を受持し読誦し書写し顯説してあるならば、かれは……諸の精舎を建立したことになる(imam dharmaparyāyan mama parinirvṛtasya dhārayitvā vācayitvā likh-itvā prakāṣayitvā vihāra api tena… kṛtā bhavati…若し我が滅後に、是の經典を聞いて能く受持し、若しは自ら書き若しは人をしても書かしむることあらんは、則ち為れ僧坊を起立し、……)。

〈第四の兼行六度品〉

いわんや、この法門を受持し、布施をもって成就するか、もしくは持戒・忍辱・精進・禪定・般若をもって成就するかするならば、その善男子・善女人は仏智を成就せしめるべき一層無量無数なる福德の生成を生ずるだううことは、いうまでもない(…imam dharmaparyāyan dhārayan dānaṇa vā saṃpādāyec~ prajñayā vā saṃpādāyed balutaram~ 況んや復人あつて能く是の経を持ち、兼て布施・持戒・忍辱・精進・一心・智慧を行ぜんをや。其の徳最勝にして無量無辺ならん)。

〈第五の正行六度品〉

……およそこの法門を受持したり読誦したり説示したり書写したり書写せしめたりするならば、その善男子・善女人は、あたかも……

の如く、仏智を成就せしめるべき無量無数なる福德の生成を生ずる  
 だらう(…evam ~ ya imam dharmā-paryāyam dhārayed vā vacayed  
 vā deśayed vā līkhet vā līkṣāyayed vā)。そのものは如来のチャイ  
 トヤを恭敬するために勤修し (tathāgata-caitya-saṅkāraṅgāni ca bh-  
 iṅkyāni bhavet) ……忍辱をもつて成就し (kṣāntya ca sampadyet)  
 ……仏法を求めて静慮を修するものとなり (buddha-dharmā-pariyeṣ-  
 tyā dhyāyī ca bhavet) ……問難を分解するのに巧みとなり百千億那  
 由他の問難に解答するものとなるだらう (praśna-prabheda-kusālas-  
 ca bhavet praśna ~ sahasraṅgam visarjyāya)。 ……およそある菩薩  
 摩訶薩は如来の般涅槃の後に、この法門を受持するならば、われに  
 よつて讚説されたかくの如きの功德があるであらう (yasya kasya-  
 cid ~ imam dharmā-paryāyam ~ dhārayata ima evam-rūpā guṇā-  
 bhavyur ye mayā parikṛitāḥ)。 ……かの善男子・善女人が立つ  
 たり坐つたり歩んだりするところには、如来のためにチャイトヤを  
 起てるべきである。そして天を有する世間は「これは如来のストゥ  
 ヲである」といふべきである( ~ tathāgatam uddiśya caityam kart-  
 avyām tathāgata-stūpaṃ 'yam iti ca sa vaktavyaḥ sadevakena loka-  
 neti)。

(若し人は是の經を誦誦し受持し、他人の為に説き、若しは自らも書き若しは  
 人をして書かしめ、復能く塔を起て及び僧坊を造り、……忍辱にして…  
 常に坐禪を貴び諸の深定を得、利根智慧にして善く問難を答へん。……若

法華經における上慢の四象との関係より見たる菩薩行(その五)(伊藤)

し我が滅後に、諸の善男子・善女人、是の經典を受持・誦誦せん者、復是の  
 如き諸の善功德あらん。……是の善男子・善女人の若しは坐し若しは立し若  
 しは經行せん処、此の中には便ち塔を起つべし。一切の天人皆供養するこ  
 と、諸の塔の如くすべし。)

(37) およそ人中の導師が滅度したとき、この經を受持するなら  
 (ya idam dhārayet sūtram nirvṛte nara-nāyake) (かれの) 福  
 徳の集まりは無辺である (puṇya-skandho aparyanto) と、われ  
 はくりかえし説いた(若し我が滅度の後に 能く此の經を奉持せん  
 斯の人の福無量なること 上の所説の如し)。

(38) かれはわれに供養を作し遺骨の塔を造つたことになる (pūjās  
 ca me kṛtās tena dhātu-stūpās ca karitāḥ 是れ則ち為れ 一切の  
 諸の供養を具足し 舍利を以て塔を起て)。  
 ……

(54) 瞋りなく悪口なくチャイトヤに恭敬し (caityasmin gaurave  
 sthitāḥ)、諸比丘に常に謙下し増上慢をいだかず懈怠なく (na-  
 dhimāni na cāśāḥ)、……(瞋らず悪口せざらんをや 塔廟を恭敬  
 し諸の比丘に謙下し、自高の心を遠離) ……

(55) 智慧あつて勇健にして問難されて怒らず (prañāvaṃs cāva  
 dhīrās ca praśnam piśo na kupyatī)、憐愍の覚慧ありて  
 (kṛpā-buddhi) 随順して生類に説示しよう(常に智慧を思惟し 問  
 難することあらんに瞋らず 随順して為に解説せん)。

(56) だれかかかるとある人ありて、この経を受持するならば(yah sūtram

dhārayed idam)、その人の福德の集まりの量は知られない(na  
tasya puṇya-skandhasya pramāṇam upalabhyate || 56 || 若し能  
く是の行を行ぜば 功徳量るべからず)。

(57) 若しだれかある人が、この経を受持し、つつある、かかるとある法師  
を見るならば、かれに恭敬をなすべきてある(yadi kaś-cin narah  
paśyed idīṣam dharmā-bhāṅakam | dhārayantam idam sūtram  
kuryād vā tasya sat-kriyam || 57 || 若し此の法師の 是の如き徳  
を成就せるを見ては)。

(58) ……その両足を頂礼して、「このかたは如来である」といふ  
想を生ずるべきである(murdhena vanditva ca tasya padau,  
tathāgato 'yam janayeta samjñam || 58 || 頭面に足を接して礼し  
心を生じて仏の想の如くにすべし or 心に仏の如しとの想を生ずべ  
し、……常想念之 如来最勝)。

(59) かれを見て、そのとき、思惟するべきである。「……諸天を  
ふくむ世間の利益のために、かれは吉祥なる無上の菩提を正覚  
するべからず」と(drisvā ca tam cintayī tasmī kale…buddhi-  
yate bodhim anuttaram sīvaṃ, hitāya lokasya sadevakasya  
|| 59 || 又応に是の念を作すべし「……無漏無為を得 広く諸の天人  
を利せん」と)。

解析構成

① 肯定される対象としての人間像は聴聞随喜ないし勤修六度  
の善男子・善女人にして法師である

善男子・善女人にして、如来の滅後に、

〈第一の随喜品〉この法門を聴聞して……随喜する(abhyannumo=  
dayisyanti 起随喜心)ならば、深心によって信解せるもの(adhyā=  
śayādhimukta 深心解相)である。

〈第二の読誦品〉受持し読誦する(dhārayisyanti vācayisyanti)な  
らば、仏舍利に対して舍利供養(sarira-pūjā)を行ひ舍利塔(sarira-  
stūpa)を建立し恭敬を行ったことになる(saukārah kṛto bhavati)。

〈第三の説法品〉受持し……顕説しつ(prakāśayitvā)あるならば  
……諸の精舎を起つたことになる(vihāra…kṛta bhavanti 為起立  
僧坊)。

〈第四の兼行六度〉受持して布施(乃至)般若(の六度)をもって  
成就する(danena vā ~ prajñayā vā sampādayet)ならば、仏智を成  
就するべき一層無量無数なる福德の生成を生ずる。

〈第五の正行六度〉受持(乃至)書写し書写せしめたりする、すな  
わちしかも如来のチャイトヤを恭敬(saukārah)するべく勤修(abhi-  
yukto || 布施ハラミツ)し(乃至)問難に解答する(般若ハラミツ)もの  
となるならば……福德の生成を生ずる。

② 要を以て別言するならば、(57)・(56)この経を受持する(idam



dhārayet sūtram 能奉持此經)なら、(88) 仏に供養 (puṇya) を作し遺骨塔 (dhātu-stūpa) を造った (以舍利起塔) ことになり、(64) チャイトヤを恭敬し (恭恭敬於塔廟) 増上慢をいだかず (nādhimānin 遠離自高心) (乃至) (65) 智慧あつて (prajñāvāt 思惟智慧) …… 問難あつても怒らず憍愍の覺慧あり (Kṛpā-buddhin) …… 生類に説示するなら、福德の集まりは無辺である (puṇya-skandho aparyanto 福無量)。

②) かくて要するに、經文中、滅後の五品の中、第五の正行六度品の末尾に、「菩薩摩訶薩(善男子・善女人)にして、如来の滅後に、この法門を受持するならば (imam dharmā-pariṣyānam vā dhī 受持説誦是經典者、われ(如来)によって讚説されたかくの如き功德が (ananta 諸善功德あるだろう) とあり、「善男子・善女人の立ち坐し歩むところには、如来のためにチャイトヤ (cāitya 塔) を起て、それは如来のストゥパ (tathāgata-stūpa 仏之塔) であるというべきである」とあるのは、五品の行の基調となるものであるから、その総相 (aṅga) として受持を強調している、と見るべきであろう。しかも偈文の(67)により「この經を受持しつゝある (dhārayat idam sūtram) ものが法師 (dharma-bhāṅaka) として恭敬 (sat-kriyā) われるべきである」ということ、(68)・(69)により「世間の利益 (hitāyālokasya) のために無上菩提を正覚するだろう (buddhisyate bodhim auttarān) から、如来(に等しいもの) であると想念 (samjñā) われるべきである」

法華經における上慢の四衆との關係より見たる菩薩行(その五)(伊藤)

ということが知られるが、これは今經の受持が法師の根本属性であり、法師をして無上菩提を正覚せしめる根本要件であることを示している。

①) へ否定の対象となる人間像は(64)により、瞋り (krodhana) あり、悪口 (piṣuṇa) あり…… 増上慢をいだき (adhimānin 自高心) 懈怠ある (alasa) もので、この法門を聴聞して毀譽する (prati-<sup>ka</sup>śip) ものである、と知られよう。

③) かくして聴聞隨喜ないし勤修六度の善男子・善女人(菩薩)にして法師なるものと増上慢をいだけるものとの決定的な分岐点は、如来の寿量の説示の法門(法華經)を聴聞し受持(隨喜へ)深心による信解・受持・説誦・顯説)するか否か、如来のためにストゥパとしてチャイトヤ(塔廟)を起てるか否かにある。

(1) WT, p. 284, l. 1-p. 286, l. 10. 正藏四四〇—四五b、国訳一二三—一二四頁。

(2) WT, p. 286, l. 29-p. 290, l. 27. 正藏四五b—四六b、国訳一二五—一二七頁。